

《ポーランドだより》13-4

俳句日本語訳：津田晃岐
przekład na japoński:
Terumichi Tsuda



ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス学園



IV konkurs literacki "HAIKU - POEZJA JAPOŃSKA" (2023 r.) - NAGRODZONE WIERSZE

Zespół Szkół Zakonu Pijarów im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu

jesień chłodniutka, 寒い秋
bawi się z wiatrem w berka, 風と楽しく
świetnie się bawi 鬼ごっこ
Zofia Hejne, 3a SP
ゾフィア・ヘイネ 小学校3年A組

kolorowy liść 落ち葉 バサッ
bęc na małego jeża ちび針鼠の
na małe kolce とげの上
Maja Zduniewicz, 3a SP
マヤ・ズドゥニェヴィチ 小学校3年A組

ktoś stuka do drzwi 戸がコンコン
biegnę otworzyć 急いで開ければ
wiosna mnie odwiedziła 春が来た
Gabriela Cieśla, 6b SP
ガブリエラ・チェシラ 小学校6年B組

wracam ze szkoły 下校の途
wiosna pełna radości 春がうれしい
mogę być spokojna もう安心
Jagoda DREWNIĄK, 8b SP
ヤゴダ・ドレヴニャク 小学校8年B組

pełnia księżycy 満月の
odbija się w tafli 薄氷に映ゆ
brudnej kałuży 水溜まり
Jadwiga Szymańska, 8b SP
ヤドヴィガ・シマンスカ 小学校8年B組

nadchodzi wiosna 春 思い出
wspomnienia znów przychodzą 帰りたい—けど
chcę tam wrócić, lecz jak...? どうやって...?
Maria Sobczak, 1a LO
マリア・ソブチャク 高等学校1年A組

nie jest możliwe 摘もうにも
zerwanie tego, czego 摘めない—目にまだ
nie widać okiem 見えぬもの
Julia Chustak, 1a LO
ユリア・フスタク 高等学校1年A組

◆選評 コンクール組織委員会 津田晃岐
今年のコンクールは、これまで審査員を務めていた津田モニカ氏(日本学者・俳人、ポーランド人)の逝去にともない、審査メンバーが、筆者(当学園高校ポーランド語・日本語教師、前回から継続)、ヨアンナ・クチ氏(同小学校ポーランド語教師、継続)、クリスティナ・プシエスワフスカ氏(同小学校ポーランド語教師)、クシニョフ・ヴァイトチャク氏(同高校ポーランド語教師)、そして梅田アグニエシカ氏(俳句を専門とし自ら句会も主宰する日本学者、ポーランド人)と、大きく変わった。今回も、去年のコンクール同様、全校生徒を対象とした。つまり、日本語学習者かどうかを問わず、当学園を構成する8年制の小学生と4年制の高校生の全員に参加資格を上げた。

応募期間は3月1～17日。句を詠んだ季節に取材したポーランド語の五七五を募集し、投句数は79句。季題は時候、動植物、生活など多岐にわたった。

入賞が、コンクール規定に定めた「3～5句」を超える7句となったのは、投句数が予想をはるかに上回ったこと、そして何よりも、この7句が同程度の審査員票を集めたことが理由である。無理やり5句に絞ることで得られるものよりも、失われるものの方が多いと判断した。なお、応募者の年齢(小学3年生～高校4年生)に大きな幅があったものの、選に際して特に区分や部門を設けることはしなかった。

入賞7句の微笑ましい素直さ、胸のすくような透明感、共感を誘われる眼差しなど、生徒たちの日常の「スケッチ」を味わってもらえたら、主催者としても訳者としても、これ以上の喜びはない。ちなみに、ガブリエラさんは2年連続の入賞である。

(つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員)

《ポーランドだより》13

俳句日本語訳：津田晃岐
przekład na japoński:
Terumichi Tsuda



ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス学園

III konkurs literacki "HAIKU - POEZJA JAPOŃSKA" (2022 r.) - NAGRODZONE WIERSZE

Zespół Szkół Zakonu Pijarów im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu

płatki śniegu 冷たくも
otulają nas do snu 綿雪包み
mimo ich chłodu 眠らせる

Dominika Jopek, 3A LOg ドミニカ・ヨペク、
高等学校3年A組（三年制）

zbliża się wiosna 春近し
słońca jest coraz więcej 陽の増えてゆく
w mym małym sercu 胸の内

Gabriela Cieśla, 5B SP ガブリエラ・チェシラ、
小学校5年B組

wybiła północ 零時打ち
huk bąbelków szampana シャンパンはじける
masz piękny uśmiech —いい笑みだ

Miłosz Rekiel, 3D LOg ミウォシュ・レキェル、
高等学校3年D組（三年制）

◆選評 コンクール組織委員会 津田晃岐

過去2回のコンクールでは、日本語を学習する高校生のみが対象だったが、今回は初めて全校生徒を対象とした。つまり、日本語学習者かどうかを問わず、しかも高校生だけに限らず、当学園を構成する8年制の小学生も含めた全員に参加資格を拡げた。これは、俳句に興味を持ったポーランド語教師（ポーランド人にとっての「国語」の先生。もちろん日本語に関しては素人）たちが授業で俳句について教えたいという希望から来たものである。そこでコンクールの審査員メンバーも刷新し、筆者（高校で日本語とポーランド語を教える日本人）、ヨアンナ・クチ氏（小学校でポーランド語を教えるポーランド人）、津田モニカ氏（日本学者で俳人のポーランド人）という顔ぶれになった。

コンクールの期間は3月1日から31日まで。冬または春に材を取ったポーランド語の五七五を募集した。応募数は10句。季題は時候、動植物、生活など多岐にわたった（例えば、黒歌鳥、雌鹿、綿雪、

冬の寒さ、春陽、春花、大晦日のパーティー）。

入賞の三句は、十七音が瞬時に、鮮やかに情景を浮かび上がらせつつ、しかも効果的な「切れ」によって独特の広がりあるいは奥行きを醸し出している。覚えている読者もいるかもしれないが、ドミニカさんは3年連続の入選である。

* * *

参加資格の拡大で、どれだけの作品が集まるのか見当もつかない中、期待と不安をもって締め切りを待った。が、いざ蓋を開けてみると、10句。数え直してみても、やはり10句（去年より少ない）。すっかり肩透かしを喰らった格好になった。

理由はいくつもあるだろうが、その一つは間違いなく、コンクールの時期が不幸にもウクライナでの戦争と重なってしまったことだと筆者は思っている。

3月に入って当校でも、キーウなどから逃げてきたウクライナの子供たちが毎日のように編入してくるようになった。急遽「ウクライナ語」や「外国語としてのポーランド語」といった教科が作られ、学校全体が慌ただしさに包まれた。ウクライナ支援や戦争反対の運動も学園内で組織された。落ち着いて俳句に向き合える雰囲気はなかった。ポーランド、ヨーロッパ、世界中を揺るがしている大きな現実の一つの間にか囲まれ、巻き込まれながら、小さな日常の風景に眼差しを注いでいくことは確かに難しい。

それでも、選には漏れたが、ウクライナの状況を何とか五七五に詠もうとした応募句もあった。周囲の大きな悲劇を自分の痛みとして、小さな詩形に込めようとしている。

proszę pomóż mi 助けてよ
na mrozie zimne ciała 凍える体
daj mi się ukryć 隠させて

Dominika Jopek, 3A LOg ドミニカ・ヨペク、
高等学校3年A組（三年制）

（つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員）

3. マンドリン奏者、作曲家として高い評価

新聞記事では「マンドリン大家」「マンドリン名手」という見出しが多い。1906年世界マンドリン大会でイタリア人大家を破り優勝、イタリアのプッチーニと並び称される作曲家などの記述もある。ドイツの蓄音機会社からマンドリン独奏のレコードが出ているとも報じられている(萬朝報 1921.10.17)。

東京での演奏会の入場料を比較して、独奏としては他の有名音楽家に劣らない金額だとも評価されている。東京の演奏会では、イワノフ作曲の「ドムカ・シベリイ」のマンドリン独奏が五回のアンコールがあったり、演奏会の締めは自身作曲の「ポーランドマーチ」の独奏をしている(函館新聞 1921.11.24)。

4. 日本各地で演奏会 (1921~22)

「マンドリン名手コバリスキー氏来京 10月26日、27日に帝国大学(東大)基督教青年会館にて演奏会 ポーランド公使館補助の下 母国のシベリア孤児救済のため。」(読売新聞 1921.10.17)

「東京第一回演奏会の後は、東北大学(仙台)、盛岡、千葉、慶応大学(東京)、秋田、弘前を経て、函館では26日、札幌27日、小樽28日、その後は、新潟、長野両県で演奏し、関西方面に向かう予定。」(函館新聞 1921.11.22)

「マンドリンの世界的名手イアン、コバリスキイ氏の音楽大演奏会は来る27日正午12時から当区美萬寿館に於て開催さるが氏のマンドリンは全く天才的で到底尋常人には学び得ぬ二重三重乃至四重音を聴取し得る奇跡的の技量を有し居り(中略)」

ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス高等学校
第2回「HAIKU—日本の詩形」コンクール(2021)入賞句

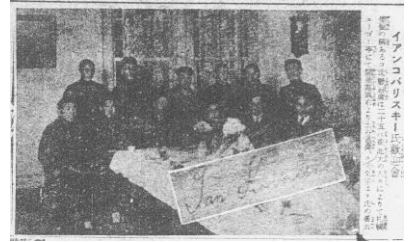
選評(コンクール組織委員会 津田晃岐, 日本語訳)

昨年同様、パンデミアの中、メールやチャットなど遠隔教育ツールを利用したコンクールとなった。期間は2月18日~3月15日、冬または春に材を取ったポーランド語の五七五を募集した。応募数は18句。季題は時候から生活、動植物まで実に様々(暖炉、毛布、節分草、鈴蘭、帰雁、兔など)。句の内容も、風景への感動や、自身の感覚(視覚、聴覚、触覚など)に注目したもの、呼び覚まされた記憶の告白など、非常に豊かだった。

その中で入賞句は静かな眼差し、新鮮な発見、ありありと浮かぶ描写、そして何よりポーランド語らしい「切れ」の鮮やかさで特に目を引いた3句である(その鮮やかさを日本語に移すのに、訳者は苦勞することになった)。

(つだ・てるみち、聖ヨゼフ・カラサンス高校日本語教員)

因に当日午後6時から氏の講演会及び歓迎会を豊平館に開く由(北海タイムス 1921.11.27)



=写真 北大の人々によるコバリスキー氏歓迎会(11.25)
文字はコ氏の署名= 北海タイムス 1921.11.30より

5. 生き立ちは謎

報道されている演奏技術や作曲能力から、ポーランド国内でそれなりの音楽専門学校で学んだか音楽家に師事したと推測され、陸軍中尉という階級も一定の学歴を思わせるが、これらについては新聞記事にも、ポーランド国内からも情報は無い。記事からエスペラントの会話もある程度出来たことが窺えるが、どこでどのように学んだかは不明。

* * *

以上はあくまでも当時日本国内で報道された情報で、その内容はポーランド国内では裏付け資料は得られていない。ロシア革命の混乱の影響や、Jan Kowalski がポーランド人にはあまりにもありふれた名前でも偽名の可能性も否定できないことなどが調査のネックになっている。

何とかして海外の情報を得るため、ドイツでレコードを出したという記事を手がかりに、ドイツ語翻訳者を介してドイツ国立図書館やグラモフォンなどに照会し、関係資料の調査を続けていきたい。

(ひきた・あきお、山梨エスペラント会会員、筑波大学附属視覚特別支援学校元校長)

samotna chatka	小屋独り
skryta pod płaszczem śniegu	雪かぶり—そこ
chcę się tam ukryć	隠りたい
Dominika Jopek, 2A po g	
ドミニカ・ヨベク、2年A組(三年制)	
pszczoły wróciły	蜜蜂の
jak boleśnie żądliły	戻れば痛き
nikt nie pamięta	針忘る
Franciszek Wytykowski, 2A po g	
フランチシェク・ヴィティコフスキ、2年A組(三年制)	
na szybie mróz	窓ガラスに
misterne wiersze pisze	寒気 詩を描(か)く—
ja je przepiszę	書き写そう
Marianna Minksztytm, 2D po g	
マリアンナ・ミンクシュティム、2年D組(三年制)	

初等・中等教育における日本語教育

1. 学制「再」改革

ポーランドの初等・中等教育界はいま大きな節目を迎えている。八年制小学校と四年制高等学校から成っていた旧学制を六三三制に変え「中学校」を新設したのが 1999 年の学制改革。それから 20 年たって、その「中学校」を廃止し昔の八四制に戻そうというのが 2017 年からの学制「再」改革である。

そもそも 1999 年の学制改革は、学校制度の近代化と EU 諸国の教育モデルとを意識して導入されたのだが、専門家によれば、近年増加する若者の攻撃的言動、学力の低下は「中学校」の存在と無関係でないという。それは、「中学校」へ進学して、慣れ親しんだ学習方法、友人関係などの連続性を断たれた「中学生」が不安定な状態に投げ出されるからだというのだ。そうしたリスクから若者を守ろうというのが「再」改革の主眼らしい。

2017 年 1 月に学制改革法案が成立すると、もうその年の秋(2017/18 年度)には「中学校」への新入学が停止された。「中学校」一年生になるはずだった生徒は、新制小学校の七年生となった。その後も年々「再」改革は進行し、今年度「最後の中学生」が高校一年になって「中学校」は姿を消した。

2. 日本語教育プログラム

「中学校」の消滅で一応の区切りはついたものの、改革はまだ続いている。というのも、今年度の高校一年には、「最後の中学生」と新制小学校の卒業生とが同じ一年にいるのだ。しかも、前者は三年で卒業し、後者は四年後に卒業する。教師は、同じ学年に同じ教科を教えていても、二つの「教育プログラム」を用意して教え分けなければならない。

ポーランドの初等・中等教育機関で学習される正規科目には、国民教育省の定める「教育プログラムの基本に関する省令」(日本の「学習指導要領」に相当するが、より法的拘束力が強い)に適合した「教育プログラム」を必ず作成しなければならない。

私も高校で日本語を教え始めたとき、最初の仕事は A4 で 50 頁以上にもなる「日本語教育プログラム」を書くことだった。そして今年度も、四年制高校のために「省令」が改正され、新しい「日本語教育プログラム」を書かなければならなかった。

日本語は「省令」中の「近代外国語」に分類されるが、「省令」は主にヨーロッパ諸語を想定している。だから例えば「省令」の「要求事項」には、「生徒は

簡単な発話が理解できる」と「生徒は簡単な文章が理解できる」がさらっと並んで出てきて、「発話」と「文章」の間に大きな溝など考えられていない。

3. Haiku コンクール

ただ、「発話」と「文章」の溝を問題にしないのは、高校生たちも同じだ。時にこちらの心が洗われるほどの純粹さで、どんどん知識を吸収していく。

だからそんな彼らのために、私のクラスでは通常の日本語の授業とは別に、日本文化を肌で体験できるイベントも毎年企画している。浴衣の着付け、書初め展覧会…そして今年は「Haiku—日本の詩形」コンクールを開催した。

冬または春に季題を取ったポーランド語の五七五。応募数は 26 句。どれも高校生らしい瑞々しさと一途さに溢れている。その中で、以下に載せた三句は、透明感ある眼差しと絶妙な措辞とで特に目を引いた入賞句である。

(つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス高等学校 日本語教員)

Liceum Ogólnokształcące Zakonu Pijarów
im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu
“Haiku - poezja japońska”コンクール入賞句
(日本語訳 津田晃岐)

dzieci na dworze	外に子ら
gra, robią psikusy	遊びお悪戯(いた)し
prima aprilis	四月馬鹿

Magdalena Frąckowiak, 2B
マグダレナ・フロンツコヴァク、2年B組

płatki śniegu	雪の片(ひら)
topnieje na policzku	頬に溶け——なに
dłaczego płaczesz?	泣いてるの?

Dominika Jopek, 1A po g
ドミニカ・ヨペク、1年A組(三年制)

blask księżycowy	月明り
srebrzy śnieżne pola wsi	雪の畑へ
jak ziarno jasne	銀の種

Oliwia Wiśniewska, 1A po sp
オリヴィア・ヴィシニェフスカ、1年A組(四年制)